

# 新たなロマンを都心から



島判官

今から200年ほど前、松前藩の領地だった東西蝦夷地が江戸幕府の直轄領となり、幕府の出先を置くことが検討されました。そのころの札幌は、石狩川のつくる肥沃な土地に密林が広がる自然の地で、アイヌ民族が豊かな文化を築いて暮らしていました。時の幕府普請役は、その様子を「左右平原広々として草木肥えその幅計り難し。……四方総て便利の地にて、相開かるの後は国の府となべき所なり」と記しています(『さっぽろ文庫7』より)

明治2(1869)年、北海道の首都建設という命を帯びた開拓使判官・島義勇が札幌に入り、本格的なまちづくりが始まりました。島判官の構想は、現在の創成川と南1条通とが交わる辺りを基点とし、42間の大通り(現在の大通公園)で街を南北に分けるとともに、12間の道路を縦横50間ごとに走らせ、

碁盤の目のようにするという壮大なものでした。財政窮乏の責任を取り、島判官は3カ月余りで札幌を去りますが、現在の札幌中心部の街並みは、この構想の上に成り立っています。

まちづくりの当初、島判官は円山の丘から東を見渡しつつ、「他日五州の第一都たらん(いつの日かこの地を世界一の都に)」と詠みました。それからおよそ130年。184万の人口を擁するまでに成長した札幌では、世界を視野に入れた、さまざまな交流が繰り広げられています。

先人たちの雄大なロマンと創意工夫の精神が、脈々と受け継がれるまち、札幌。21世紀を迎えた今、その札幌の顔ともいべき都心を舞台に、新たなまちづくりが始まろうとしています。

※1間≒1.82m、42間≒76m



明治6年(1873年)



大正2年(1913年)



昭和10年頃(1935年頃)



昭和32年(1957年)



現在

写真提供 / 北海道大学附属図書館

広報さっぽろ増刊号2002

## 特集 都心のまちづくり 世界都市さっぽろ。都心の元気がまちの活力。 CONTENTS

[特集1]

魅力ある都心のまちづくりが始まっています 2

[座談会]

世界都市としての魅力を高めるためには 座談会出席者 小林英嗣氏・竹内宏二氏・森下慶子氏 5

[特集2]

都心はこんなふうに変わりつつあります 8

[私の提言] 風土的都市デザインと札幌 伊藤滋氏 13

[スペシャルインタビュー] 21世紀の世界都市とは?

黒川紀章さんが考えるこれからのまちづくり 14

[おわりに]

市長からのメッセージ 新時代の都心づくりを皆さんと一緒に考えていきたい 16